

令和2年度 岡山県立林野高等学校 具体的な学校経営目標・計画

重点目標	関係分掌	課題	方策（具体的取組）	評価基準（評価可能数値）	中期進捗状況	評価	年度末達成状況	新年度への課題
1 資質・能力の育成を基盤とした授業改善を進め、教科間の指導連携やICT等を利用した授業法の開発を進める。	教務課	○資質・能力の育成を基盤とした授業改善を進め、教科間の指導連携やICT等を利用した授業法の開発を進める。ICTの活用促進。 ○観点別評価の正当な運用 ○新教育課程の編成	○G SuiteとClassiそれぞれの強みを生かせる分野を研究し、教員間でICT活用方法を共有できる仕組みを作る。 ○ICT活用教員研修会の企画・実施。 ○他教科の授業公開と見学、授業研修会の実施。 ○授業改善研修会（年2回）、授業公開週間（年2回）の実施。 ○評価のしよみの改革を、教科とMDPの指導の工夫につなげる。 ○学校の現状に即し、かつ教科バランスのとれた教育課程編成をおこなう。 ○教育課程委員会と教科会議の連携（観点別評価の運用、教育課程編成への理解と協力）。	○G SuiteとClassiそれぞれの強みを生かせるICT活用方法を共有し、校務の効率化を進めることができる。 ○授業公開週間で、全員の相互授業参観が3回以上になる。 ○生徒と教員アンケートで、教科・MDPの資質能力の育成に関する項目や評価に関する項目の肯定率が80%以上になる。 ○GW明け新教育課程（教務案）の作成、1学期末までに原案を作成し、県との協議を開始できる。	○4月段階では授業内でのICT活用やオンライン授業などに踏み切ることができない教科があったが、臨時休業をきっかけに全員が何らかの形でオンライン授業をおこなうことができ、休業が明けても引き続き活用研究が進んでいる。また、みまさか学やMDPでは外部講師による指導助言をオンラインで実施していただいた。 ○6月の授業公開週中は、全員が相互授業参観に参加した。11月はChromebookの活用実践を中心に、校外にも授業公開を実施する。 ○成績通知に際して、評点の記載を廃止し観点評価の通知に完全に切り替えた。 ○MDPの年間の評価計画を改定作成できた ○新教育課程の検討作業は進行中、9月末に原案をまとめた	A	○ICTの授業での活用については研究と実践を進め、活用方法を校内だけでなく校外にも広めることができた。また、欠席者に対してオンライン授業を行うこともできた。11月の授業公開はコロナ感染状況を配慮して延期し、1月に実施することができた。（53団体、88名参加）学校自己評価アンケート「学校は学校の魅力化のためにChromebookを活用した先進的な取組をおこなっている」肯定率：生徒（平均）94%保護者（平均）94%教員100% ○育てたい資質・能力を明らかにした上で、指導と評価が一体となった授業改善を進める。	
	進路指導課	○新しい調査書様式へ対応した、ポートフォリオの蓄積の研究と方策をより一層進める必要がある。 ○新入試で求められる思考力・判断力・表現力を生徒に身につけさせるために、授業改善・指導法改善を進める。	○LHR・ST ○6月進路セミナー ○進路講演会 ○模擬試験・GTEC ○補習・学習セミナー ○7月求人開始、8月総合型選抜、9月就職選考開始、10月学校推薦型選抜、1月大学入学共通テスト、2月前期試験、3月後期試験	○生徒の、drive上でのデータ蓄積90%以上（アンケートによって検証） ○CT受験者が、各教科の平均点以上得点している。 ○国公立大学の総合/学校推薦型(現AO/推薦)選抜において15名以上の合格者を出す。 ○国公立大学合格者数合計25名以上の合格者を出す。	・1・2年次では、Classiにキャリア・パスポートなど活動記録の入力をすすめている。 ・国公立大学の総合型選抜に文系8名・理系2名・学校推薦型選抜に文系10名・理系1名が国公立大学に出願予定。 ・3年次生の面接・小論文指導においては、学部・学科の特性をふまえた上で担当を決め、全教員で指導に当たっている。 ・休校期間中は、オンラインで三者懇談を実施し、保護者の意見をふまえて進路指導を行った。 ・芝浦工大の教授・大学生と共に西栗倉村の地域調査をオンラインで行った。	B	○1・2年次では、Classiにキャリア・パスポートなど活動記録の入力をすすめている。 ○国公立大学の総合型選抜に文系2名・理系2名が合格・学校推薦型選抜に文系7名・理系1名が合格し、合計12名合格を果たした。 ○共通テスト試験は77名が受検。2/17現在の合格者数は、国公立大14名、私立大のべ58名、短大・専門40名、就職13名である。	○新入試に求められる思考力・表現力を身につけるために、授業改善はもちろん学校教育全体で取り組んでいく。
	3年次	○新入試に求められる思考力・判断力・表現力のうち、生徒が自己の活動や進路志望をアウトプットさせる機会を多く設け、表現力を身につけさせる。	○進路実現に向け見通しをもって活動できるよう、担任面談を定期的に行い、進路ノートを活用し、入試・採用試験までの計画書を作成し、担任に説明する機会を設ける。	○国公立大学合格者数を合計25名以上出す。内、総合型選抜・学校推薦型選抜における合格者数を合計15名以上出す。	担任による適時適切な面談が行われており、国公立大学の総合型選抜に14名の出願、学校推薦型に14名の出願、合計28名(9月11日現在)を予定している。総合型選抜・学校推薦型選抜出願者の一人ひとりの志望学部・学科に合う担当教員をつけ、取り組んでいる。	B	○国公立大学合格者数は12名(1月8日現在)。 ○課題に挙げている身につけさせる力の育成については、進路実現に向けての活動の中で、自らの考えや計画を自身の言葉で説明することはできるようになっており、多くの生徒はおおむね課題を解決できている。	○2年次終盤から受験に関わる志望理由のトレーニングをし、自らの進路を表現することはできるようになったと感じるが、受験に適用するレベルには至っていない生徒も多かったが、添削して、ある程度完成したものを作り上げるには時間をかける必要がある。
	2年次	○生徒個々の校内外の活動データを蓄積し、次年度に向けての学びにつなげる。 ○STを効率的に活用する。	○G suiteを活用した授業展開を実施する。 ○Classiを活用した学習記録や活動記録の蓄積。 ○STで3教科プレテストを実施し、基礎学力の身長を測る。	○学習記録を生徒全員に毎日つけさせ、記録を元にした個別指導ができる。	classiの利活用について、学習記録はオンライン期間以降は頓挫した。一方で、面談記録を継続的に残しており、進路指導上で活用している。今後、学習記録の蓄積に関して、ポートフォリオやキャリアパスポート、活動報告書との必要性和ら合わせながら進めたい。	B	○面談記録・ポートフォリオの蓄積は1年間継続して行うことができた。各教科で学習面における個別対応にも取り組むことができた。	○年間を見通した体系的な指導を具体的に詰めていく。
	1年次	○ICT機器の活用および学習者中心の授業展開。	○Chromebook(Gsuite, Classi)を活用した、ペア・グループによる学び合いや考えをまとめたり表現したりする活動。	○授業評価アンケートの肯定的回答が80%以上。	○Chromebookの授業での活用は教科目によってはかなり実践されている。個人の活動等のために利用している機会も多い。 ○授業評価アンケート「この授業では、生徒どうしが教え合い、考えを深め合う機会がありますか」の「当てはまる・大体当てはまる」が93%。(Chromebookの活用とは限らない) ○Chromebookを教科外で長時間使用していると思われる、学習時間の確保にも苦慮している。	B	○ほぼすべての教科目でChromebookが活用され、個人だけでなくペアやグループによる活動の一助となっている。 ○授業評価アンケート「この授業では、生徒どうしが教え合い、考えを深め合う機会がありますか」の「当てはまる・大体当てはまる」が90%。(Chromebookの活用とは限らない)	○Chromebookの利用による資質・能力の育成、学力向上保障。 ○Chromebookの教科外使用の問題。 ○家庭学習におけるChromebook利用の習慣化定着。
2 生徒自身が主体的、計画的に取り組む活動を展開する。	生徒課	○球技大会やあがりん祭などの学校行事で生徒自身が主体的、計画的に取り組むよう展開する。	○生徒が主体的に行動できるように、学校祭や球技大会の企画・運営に多くの生徒を関わらせるとともに、一部の中心となる生徒だけでなく、生徒全体が活動に関わる場を作る。 ○学校行事にクラスとして参加する場合は、できるだけ多くの生徒に役割を割り振れるよう係を細分化する。	○集団の中で活動するときに、多様な価値を認め協働することができる。 ○学校自己評価アンケート「学校行事やホームルーム活動において、生徒自らが主体的に取り組んでいる。」の生徒肯定率が、各年次とも90%以上。	あがりん祭では一人一人が参加していることを意識させる手段としてクラスTシャツを作成した。その結果、クラスのまとまりが生まれた。生徒は積極的に活動していた。来年度以降もグルデモはこの形で行きたい。多くの生徒に役割を振るために応援旗の作成も考えた。生徒会選挙、生徒総会、外部講師を招いての講演会などをオンラインで教室とつなぎ行った。	A	○マスクをなくすことで生徒1人1人にクラスTシャツを作成する費用が捻出できた。気温のことやコロナの感染防止のため、規模を縮小した結果であったが、おおむね好評だった。 ○次年度に向けて、生徒対象のアンケート（あがりん祭）を実施した。	○アンケートの結果の反映及び生徒会が行事にもっと関わらせたい。アンケートの項目の作り方を生徒に工夫させる。
	厚生課	○感染(新型コロナウイルス感染症等)についての知識、予防法、心構えを学ぶ。 ○望ましい朝食・排便・睡眠等の実現継続のための知識や方法を学ぶ。 ○学校環境の実態を知り、清潔で安らぐ環境作りの方法を学ぶ。	○保健委員がLHRや保健便り、望ましい朝食・排便・睡眠等の実現継続のための知識・方法や、感染(新型コロナウイルス感染症等)についての知識・予防法・心構えを啓発する。 ○美化委員がLHRで校内の危険な場所や清潔でない場所を示し環境美化を啓発する。	○保健委員がLHRや保健便りで感染や生活習慣についての正しい知識を年10回以上啓発する。 ○学校自己評価アンケートで「校内の清掃がよく行き届き、清潔に保たれている。」について、生徒、及び、教職員が70%以上の肯定率である。	○保健委員会3回啓発活動を実施した。 ○美化委員会ゴミ分別についての啓発を1回実施した。 ○厚生LHR(9/15)で保健・美化委員会による啓発をした。	B	○保健委員会10回啓発活動を実施(予定)。 ○保健委員会による教室の二酸化炭素濃度測定実施。 ○美化委員会はゴミ分別についての啓発を1回実施し、週3回ゴミステーションにおいて分別を行った。一般生徒の分別意識も高まった。 ○厚生LHR(9/15)で保健・美化委員会による啓発をした。 ○学校自己評価アンケートで「校内の清掃がよく行き届き、清潔に保たれている。」について、肯定率が生徒65%(←55%)、教員81%(←59%)で、昨年度と比べて、上昇した。*()は昨年度	○清掃・清潔肯定率のさらなる向上。(特にトイレ等)
3 生徒が教育活動を通じて社会と関わり、他者とともに自己を分析し理解することができる。	生徒課	○生徒が教育活動を通じて社会と関わり、他者とともに自己を分析し理解することができる。	○社会に関わる場として、ボランティア等の場に参加できる機会を増やすよう、生徒に積極的に呼びかけをする。	○学校自己評価アンケート「社会に貢献する意義を理解している」の生徒肯定率が80%以上。	ボランティアの機会が減ってしまったが中学校の学習支援ボランティアでは、予想以上の参加者があってよかった。	B	○社会貢献活動を実施することが出来た。ふれあい祭りも1時間にカウントしていたので、その分の実施が3学期になっている。 ○大原中学校への学習支援ボランティアは6人が参加。 ○地域の中学校へ出向き、クロムブックの使い方についての補助に貢献できた。	○ボランティアに関してこまめに連絡を取ってきたい。 ○来年度は周辺校でクロムブック導入の年になるので高校生がどのように貢献できるか連携をしていきたい。
	進路指導課	○自己分析・理解した上で、自立的に進路を選択する力を身につける必要がある。	○進路実現に向け、見通しをもって活動できるよう、進路ノート等に計画を立てる。 ○就職・進学に向けての面接・小論文指導では学校全体での指導体制をとる。 ○新入試制度の最新情報を教員・生徒・保護者に提供・共有する。 ○生徒理解を深め、教員間の共通理解を図り、指導体制を共有する。 ○教員自身が生徒に身近な社会人として、生き生きとした姿を見せる。	○生徒の進路決定満足度90%以上(アンケート数値による検証)。 ○進路ノート、Classiを活用し、進路実現に向けて自主・自律的に行動できたかの振り返りを行う。 ○Classi・キャリア・パスポートに自己の活動を記録・蓄積し、振り返りを行う。	・各種アンケート未実施のため、客観的な数値による検証は不可能だが、「生徒自身のキャリア形成能力」育成は不十分な印象。社会に関わる機会を設定したい。 ・「進路セミナー」を7月に実施し、生徒にとって最適な科目選択や進路選択をするための支援となった。	B	○各種アンケート未実施のため、客観的な数値による検証は不可能だが、「生徒自身のキャリア形成能力」育成は不十分な印象。コロナの影響もあり、社会に関わる機会を設定が困難であった。 ○1月に「社会人基礎力養成講座」を実施、3月に「卒業生語る会」を実施予定。	○自己理解を深める為に、様々な機会を紹介・設定する。 ○自己の世界を広げるため、社会と関わる場を設定する。

重点目標	関係分掌	課題	方策（具体的取組）	評価基準（評価可能数値）	中期評価	中期進捗状況	評価	年度未達成状況	新年度への課題
	3年次	○自己の将来を見通して、進路実現に向けた活動を計画・実行する力を身につける。	○進路実現に向け見通しをもって活動できるよう、担任面談を定期的に行い、進路ノートを活用し、入試・採用試験までの計画書を作成し、担任に説明する機会を設ける。	○生徒の進路決定満足度90%以上(アンケート数値による検証)。 ○進路ノート、Classiを活用し、進路実現に向けて自主・自律的に行動できたかの振り返りを行う。	B	Classiの活用はできていない。しかし、生徒は進路実現に向けて自主・自律的に行動している。3年次団・進路課を中心に、生徒の進路志望と計画に伴走し、志望理由書の添削や面接練習を行い、生徒の進路実現に向けて全力で取り組んでいる。	B	○Classiの活用はできていない。 ○9割5分程度の生徒が課題に挙げた力を身につけることができ、進路が決定した生徒についても、4月から始まる次の新たなスタートに向けて、残りの高校生活で何をすべきか考え、取り組み姿が見られた。	○進路ノートを利用して、受験に関わるスケジュールを自分で立てさせる。そのスケジュールをGoogleのスプレッドシートで担任団が共有することで、クラス生徒の面談の予定も把握できたため、大変有効だった。今年度、C組が活用している。
5 「開かれた学校」の観点から、小中学校・地域との連携を図る。	教務課	○「開かれた学校」の観点から、小中学校・地域との連携を図る。 ○MDPを軸に教科間で連携した指導方法の研究。 ○小中連携のしくみ作り、広報活動(県内+全国募集)、入学生定員確保。	○教員だけでなく、生徒を中心として学習支援ボランティアやICT活用指導など小中学校とのつながりを作ることのできる広報活動を行う。 ○みまチャンネル、美作市広報との協力・連携。 ○RMコーディネーターとの連携(MDP、みまさか学)。	○林野高校で学びたいという小中学生が増え、定員を充足することができる。	B	○新型コロナの影響で生徒による学習支援や学童保育ボランティアはほとんど実施することができていない。 ○生徒のようすをわかりやすく伝えるポスターやプレゼンを作成し、広報することができている。9月以降の各中学校での学校説明会では校長がオンラインで中学生に呼びかけたり、塾共催の説明会では在校生と保護者に学校生活について説明してもらったりと、これまでにはなかった内容で学校紹介をおこなっている。 ○他校がOS実施を見送る中でも、感染症対策(参加制限、消毒や検温、オンライン全体会、動画での部活動紹介など)をとりながら2回のOSを実施できた。 ○MDPはコロナの影響で実施回数が極端に減少している。後半の活動の工夫が必要。 ○美作市小中学校教員対象のChromebook活用研修に講師として3名の教員が参加	B	○大原中学校で学習支援ボランティア、勝田中学校でChromebook活用スタートの支援ボランティアに生徒が参加した。 ○進路説明会や学校運営協議会での生徒や保護者による学校紹介や活動紹介、生徒の姿が見えるポスターなどは校外から好評価をいただいた。 ○12月の中学生進学希望調査では希望者が87名(0.73倍)と依然厳しい状態である。	○引き続き生徒の成長した姿を見ていただきながら、本校の良さを知っていただけるような広報をおこなう。 ○ICT活用を中心に小中との連携を深める。
	生徒課	○生徒会活動、部活動等で校外との連携が必要である。	○生徒会活動や部活動において、地域の人々や他校の生徒、中学生と交流することで多様な価値観に触れる。 ○ボランティア活動を通して地域との連携を図る。	○生徒会または部として、学期に2回以上参加できる。	B	バスケットボール部が美作中・北陵中と練習試合。ソフトテニス部が作東中・勝山中・津山西中・落合中と練習試合。剣道部は大原中・英田中と練習試合。サッカー部は津山東中と練習試合をした。バレーボール部は11月に北陵中学校と合同練習を計画。	B	○バレーボール部は1月に奈義中学校、津山東中学校と練習試合。 野球部は12月に美勝英地区の中学校と合同練習会。 サッカー部は勝央中学校、北陵中学校と練習試合。 ソフトテニス部は2月に美作中学校、作東中学校、勝央中学校と合同練習試合をした。 ○生徒会はペットボトルキャップ運動の実施。	○中学校との連携が出来てきた。この連携を継続していきたい。
	厚生課	○「開かれた学校」の観点から、校外との連携を図る。	○教育相談を行い、関係者と情報を共有している。教育相談において、クラスや保健室からSCへ、SCからSSWや医療機関等への連携を図る。	○SCには年17回、SSWには年12回以上来校してもらい、連携して生徒の支援ができる。	B	○SCによる教育相談を6回実施した。 ○SSWも月1～2回来校し、情報交換した。	B	○SCによる教育相談を16回実施、SSWも月1～2回来校し、教員との情報交換が定期的に行えた。	○生徒の状況に応じて、医療機関や福祉行政機関との連携も図る。 ○教育相談の回数が増えたが、希望生徒の教も増加したので、さらに回数を増やせるかの検討。
	進路指導課	○詳細な進路情報・進路実績を広報する必要がある。	○教務課と連携し、ニュースレター・ダイレクトメール・HP等に進路実績・進路行事を掲載する。	○ニュースレターに3回・ダイレクトメールに3回(年5回発行)詳細な進路実績・進路情報を掲載する。	B	ニュースレターに進路実績を掲載した。	B	○ニュースレターで総合型・学校推薦型選抜入試等の結果を広報することができた。	○HP・ニュースレター等で進路実績を随時広報していく。
	運営委員会	○時間的には限られているため、事前の分掌間での連携が必要である。	○毎週実施される連絡会により、短いサイクルで密な検討を行い、学校運営において早い対応を行う。	○毎週1回(月4回)の実施。	B	予定通り実施できている。やや、時間オーバーになりがちであるので、効率の良い運営を目指していきたい。	B	○時間オーバーする頻度は中間段階よりは改善されたが、今後も効率の良い運営を目指す必要がある。	○連絡事項を効率良く終わらせ、協議事項に時間をかけることができるような工夫が必要である。
	教務課	○各担当業務の必要性・効率・成果の検討。 ○組織的で効率的な学校経営や個人の意識改革を進め、負担軽減を図る。	○業務内容の精選。 ○校務フォルダの整理(年度ごとのフォルダへの移行、ICT活用資料の共有フォルダの作成)。	○分掌の業務を精査し、外部発注も含めて業務の無理や無駄を減少させる。	B	○学校案内の外注、学校ホームページの改編の業者委託が実現した。 ○校務フォルダを年度ごとのフォルダ管理に移行し、整理を進めている。 ○ICT活用事例の集約も進行中。 ○中学校向けの広報活動に力を入れる時期になり、担当者の業務が増えてしまっていることもあり、業務の個人負担を軽減するために課内の分掌担当を見直した(9月中旬から変更)。	A	○学校案内の外注、学校ホームページの改編の業者委託が実現した。 ○校務フォルダを年度ごとのフォルダ管理に移行し、整理した。 ○ICT活用事例を集約した。 ○課内の分掌を見直し、業務の標準化を進めた。	○各課員の業務負担が過度に重くならないよう、課内分掌の見直しをさらに進める。
	生徒課	○9月に行われていたあがりん祭文化の部とふれあい祭りを一本化するなど、行事の精選を図る。	○行事ありきの計画ではなく精選に向けたアイデアを出し合う。 ○忙しさが集中している担当がいたら、仕事を分散させる。 ○負担軽減を実感できているか学校自己評価アンケートの項目に入れて調査する。	○行事を2つ以上減らす。 ○学校自己評価アンケートの項目に入れる。	B	文化の部とふれあい祭りの一本化はできた。月一回の登校指導は学期に一回に変更。挨拶運動週間は生徒課としては廃止。後援会をリモートで開催。	B	○あがりん祭体育の部を短縮で開催できた。練習時間が確保出来たこと、午前中で切り上げること考えながら、グルデモの編成を縦割りからクラス単位に変更した。時間も3分に短縮したが、生徒会を中心にクラスTシャツを作るなどして一体感を作り出した。	○あがりん祭体育の部と文化の部を分けての開催を実現していく。 ふれあい祭りは行わない。 文化の部との統合ではない。
進路指導課	○進路行事の精選・再考を図る。 ○ICT機器を活用した業務の効率化を図る。	○土曜日補習(SSF)の廃止。 ○Classiで家庭学習実態調査・進路希望調査等で実施する。	○各行事の教員負担の軽減化。	B	SSFを廃止することができた。	B	○進路セミナーを業者に委託することで、大幅な業務軽減ができた。	○各行事の意義を確認し、精選を図ってきたい。	
厚生課	○新型コロナウイルス感染症に対して、無理なく継続できる対策。	○ICT活用PTと連携して、毎日の検温・体調連絡フォームを作る。	○煩雑な処理をしなくても、毎日、生徒・教職員の体温・体調が100%把握できる。	B	○4月当初より検温フォームを用いて、生徒・教職員の健康観察を実施できている。 ○毎朝の検温→入力という手順が生徒・教職員に大体定着している。しかし、入力忘れや遅れもまだいらかある。	B	○4月当初より検温フォームを用いて、生徒・教職員の健康観察を実施できている。 ○毎朝の検温→入力という手順が生徒・教職員に大体定着している。しかし、入力忘れや遅れもまだいらかある。	○学校に来る前、家庭での検温・入力の徹底。	
3年次	○業務時間外の生徒面談をICTを活用し、効率化・時間の削減を図る。	○Classiの生徒カルテ等を活用。	○昨年度に比べ、3年次団の業務時間の2割減。	B	Classiの活用はできていない。今後、総合型選抜、学校推薦型選抜、就職試験が本格的になる中で、担任団の業務を削減のため、志望理由(面接)・小論文担当者を検討会後すぐに決定していきたい。	C	○Classiの活用はできていない。 ○業務時間外の業務削減を目指したが、生徒の進路実現に向けて、放課後の進路指導は欠かすことができないものであるため、出願時期は例年通り、業務時間を超過する担任が多くなった。		
2年次	○STやLHRの活用を見直す。 ○定時退庁を促す。	○放課後面談の時間をできるだけLHRやSTに充てる。	○会議の回数を昨年度10回だったものを減らしていく。	A	会議数は現在4回。修学旅行がなくなったものの、連携を掲示板や回覧の活用で補いたい。	A	○会議数は現在5回、回覧や連絡ボードでスケジュールの管理ができた。STにおいては後半は模試の時間に充てることができた。	○これ以上の時間捻出は厳しいが、回覧を用いるなどして意見の共有を図りたい。	
1年次	○放課後会議の削減。 ○ICT機器の活用による業務の効率化。	○教員間の普段のやり取りや年次団回覧・連絡ボードによる情報共有。 ○Chromebook(Gsuite、Classi)による調査回収・記録集計。	○放課後会議は原則行わない。 ○全員が使える、共有できる。	B	○教務室内で情報の共有がしっかり行っている。 ○GsuiteとClassiの場面による使い分けに苦慮している。	B	○毎朝の打ち合わせ、連絡ボードの常時利用や適宜回覧を利用することに加え、日常のやり取りを含めて年次団内の情報共有が十分行えた。 ○Gsuiteの利用はClassroomを中心に大いに進んだが、Classiの利用は十分とは言えない。	○年次団内の情報共有におけるChromebookの活用。	